5, 6世紀朝鮮半島西南部における「倭系古墳」の造営背景

An Analysis of the Background of Japanese-style Tombs Built in the Southwestern Korean Peninsula in the Fifth and Sixth Centuries

高田貫太

TAKATA Kanta

はじめに
❶朝鮮半島西･南海岸地域における「倭系古墳」の造営背景
❷栄山江流域における前方後円墳の造営背景
おわりに

【論文要旨】

近年，朝鮮半島西南部で 5，6 世紀に倭の墓制を総体的に採用した「倭系古墳」が築かれた状況が明らかになりつつある。本稿では，大きく 5 世紀前半に朝鮮半島の西・南海岸地域に造営された「倭系古墳」，5 世紀後葉から 6 世紀前半頃に造営された栄山江流域の前方後円墳の造営背景について検討した。

5 世紀前半頃に造営された西・南海岸地域の「倭系古墳」を構成する諸属性を検討すると，臨海性が高く，北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。よって，その被葬者はあまり在地化はせずに異質な存在として葬られたと考えられ，倭の対百済，栄山江流域の交渉を実質的に担った倭系渡来人として評価できる。そして，西・南海岸地域の在地系の古墳には，多様な系譜の副葬品が認められることから，海上交通を基盤とした地域集団の存在がうかがえる。倭と百済，または栄山江流域との交渉は，このような交渉経路沿いの要衝地に点在する地域集団の深い関与のもとで，積み重ねられていたと考えられる。

5 世紀後葉から 6 世紀前半頃，栄山江流域に造営された前方後円墳と，在地系の高塚古墳には，古墳の諸属性において共通性と差異性が認められる。これまで両者の関係は排他的もしくは対立的と把握される場合が多かったが，いずれの造営集団も，様々な交通路を利用した「地域ネットワーク」に参画し，倭や百済からの新来の墓制を受容していたという点において，併存的と評価すべきである。したがって，前方後円墳か在地系の高塚古墳かという違いは，諸地域集団の立場からみれば，新来の墓制に対する主体的な取捨選択の結果，ひいては百済中央や倭系渡来人集団との関わり合い方の違いの結果と評価できる。

このような意味合いにおいて，その被葬者は基本的には百済や倭と緊密な関係を有した栄山江流域の諸地域集団の首長層と考えられる。ただし，倭や百済との活発な交渉，そこから渡来した集団の一部が定着した可能性も考慮すれば，その首長層に百済，倭に出自を有する人々が含まれていた可能性もまた，考慮しておく必要はある

【キーワード】栄山江流域，前方後円墳，倭系古墳，渡来人，古墳時代